

[講演要旨] 三重県伊勢・長野県下伊那などの西方遠隔地で書かれた 1707年富士山宝永噴火の目撃記録

小山真人(静岡大学)・西山昭仁(大谷大学)

1. はじめに

富士山の宝永噴火は、宝永四年十一月二十三日(1707年12月16日)から16日間に及んだ、火山礫・火山灰放出を主とする大規模かつ激しい噴火だった。筆者らは、噴火の特徴・メカニズムを探るとともにハザードマップの検討に資するため、宝永噴火の詳細な推移の復元を試みている。

今回は、富士山から西方に距離を置いた遠隔地からの目撃記録を検討した。宝永噴火の噴煙は真冬の偏西風によって東方に流されたため、関東地方の記録からは降灰の状況がよくわかる一方で、噴煙柱の高さやその時間変化などの状況はつかみにくい。また、富士山麓の記録からは被害の大きさや住民の恐怖がわかる一方で、やはり噴火の全体像はつかみにくい。

その点、西方遠隔地の記録には、噴煙柱の観察記録や、規模の大きな鳴動・空振や前兆地震の体感記録と考えられるものがあり、噴火の物理像を描く上で興味深いデータを提供している。また、噴火が続く中で東海道を旅した者の体験談も含まれており、地元史料が乏しい地域の状況がわかる。

2. 検討した史料

今回取り上げる史料は、『外宮子良館日記』、『大地震之記』、『宝永四年歳中行事』、『蔵人日記』の4点である。いずれも、その内容から判断して、体験者自身あるいは体験者から直接伝え聞いた者が記した記録と考えられる。

『外宮子良館日記』は、伊勢神宮外宮に伝わる日記であり、国書総目録によれば康暦二年(1380)から明治二年(1869)に至る231冊が伊勢市の神宮文庫に所蔵されている。『宝永四年歳中行事』は、新収日本地震史料(以下、新収史料)によれば、信濃国市田村(現長野県下伊那郡高森町)の庄屋であった上原彦右門による記録であり、飯田市立図書館に所蔵されている。『大地震之記』は、現長野県下伊那郡下条村の鎮西家(京都大学名誉教授の鎮西清高氏の実家)に伝えられた記録である。

以上3史料については、新収史料のために使用された元史料のコピーが東京大学地震研究所都司研究室に保管されていたため、そこから新たに翻刻をおこなった。一方、『蔵人日記』については現時点で原史料の所在が不明なため、新収史料に収録されたもの(地震第1輯16巻で紹介された『熊野地震史料』から再録との記述あり)を読んだ。

なお、参考までに以上4史料の新収史料(いずれも第三巻別巻)における収録ページは、『宝永四年歳中行事』(p.98)、『大地震之記』(p.100-101)、『外宮子良館日記』(p.281-283)、『蔵人日記』(p.303-306)である。

3. 宝永噴火の記述

これらの史料がもつ火山学および火山防災学的な価値は、以下の3点である。

1) 下伊那の2史料には噴火開始前日から前兆地震とおぼしき地震記録が複数あり、他地域のものと比較・同定することによって、個々の地震の震度分布が推定可能である。また、両史料には規模の大きな鳴動・空振が感じられた日付と時刻の記述もあり、噴火の消長の推定材料ともなる。

2) 『大地震之記』には、噴火初日と二日目の噴煙柱の目撃記録があり、とくに初日の噴煙柱高度が夕方前にいったん低下したことがわかる。他地域の史料や噴火堆積物と比較することにより、噴火初日昼の激しい軽石噴火の後、スコリア噴火に移行する日没前に短い小康状態があったと推定できる。さらに、噴火期間の末期に再度噴火が激しくなったことを裏づける記述もある。

3) 伊勢の2史料には、神宮使の一行が江戸から伊勢に戻る途中の東海道上で宝永噴火に遭遇した体験談が含まれている。激しい降灰によってなかばゴースタウンと化した小田原の状況描写、箱根・三島などでの降灰状況と夜間に火口から立ち上る火柱や火山弾飛散の描写、噴火期間中の最大規模の地震の体験談などがあり、貴重である。